

(4) 柵管理のポイント

侵入防止柵の最大のポイントは管理であり、いかに維持管理を継続して効果を得るかが、侵入防止対策の成否の分かれ目となる。管理は日常的に行うことが理想的である。したがって、柵を設置する場所やルートは日常的に目の届く範囲とすることが重要である。例えばヨーロッパでは、森林に侵入防止柵を設置することがあるが、それは森林面積が日本よりも少なく(ヨーロッパの森林面積は一般的に20%程度、日本は68%で3倍以上)、丘陵地形であるため、森林から野生鳥獣が出ないようにする必要がある。また、ヨーロッパの多くの国では、野生鳥獣であるイノシシやシカは狩猟資源として土地所有者(森林所有者)の所有物となっており、近隣で農作物被害が発生した場合には、所有者に賠償責任が生じる。対して、日本はイノシシやシカは無主物であり、森林率も高く、標高差も大きいことから「山林」に柵を設置することは多くの場合、費用対効果が低いものになってしまうのである。

日常的に目の届く範囲に柵を設置したとしても、毎日、柵の見回りをして、補修作業を行うことは容易ではない。したがって、被害が発生する時期を把握しておき、その前や農閑期などに集中的に柵の見回りと補修・補強作業を行って効率化を図る工夫も必要である。例えばシカの場合には、田植え直後から水稻苗の食害が発生する。したがって、田植え前に柵の見回りと補修などを行う。イノシシの場合には乳熟期頃に水稻の食害が発生する。そのため、8月中下旬頃(品種にもよる)に柵のメンテナンスを集中的に行うなど、メリハリのある柵の管理を行うと良い。できれば栽培暦に柵の設置管理を入れ込んでいくことが理想である。

また、農閑期に地域で寄り合いがある場合には、被害の発生状況や対策状況を話し合ったり、共同で柵周辺の見回りをしたりして、被害対策の状況を地域内で共有することが有効である。これらを地図に記すなどして鳥獣被害とその対策を可視化して、柵の管理や、わなの設置、環境整備などの地域戦略を練って行くことが鳥獣被害に強い地域づくりにつながって行くのである(図3-1-6)。

図3-1-6 集落内での情報共有の流れ



集落周辺、柵周辺の環境やイノシシの出没状況を踏査する



地形に合わせた柵の設置や補強(維持管理を考えて実施)



イノシシの出没状況が分かれば、そこから捕獲を進める



集落内での被害対策の話し合いの様子

これらの
情報を...

- 集落内で共有
 - 実施体制、管理体制も検討
 - 集落の将来像も考えておく
- ⇒戦略的に対策を進める

(5) 侵入防止柵の補強技術

① 侵入防止柵の補修や管理の工夫

侵入防止柵は設置するだけでなく、点検・補修や改良の工夫を続けることで効果が維持される。ワイヤーメッシュや金網などの金属柵と電気柵を合わせる、下部を補強するなど、種々の工夫による防御方法や資材が開発されている。

② 下部の補強

ワイヤーメッシュや金網はイノシシによる下部からの侵入を防ぐことが重要である。下部が劣化した柵を補修する資材、電気線を簡易に敷設できる碍子や、下部からの侵入を防御する資材など、有効な資材が多数普及している。

③ 飛び越え防止の工夫

シカでは柵の飛び越えを防ぐことも重要である。多くのワイヤーメッシュや金網が2m近い高さに設置されているが、それでも飛び越されるような場合、ノリ網や簡単なワイヤー等で高さを加えることで防ぎやすくなる。



写真3-1-3 金属柵の下部に電気線を簡易に敷設できる碍子



写真3-1-4 金属柵の下部に侵入防止の裾を敷設する



写真3-1-5 金属柵にノリ網や簡単なワイヤー等で高さを加える